オレにも言わせろ！

北海道長沼発 ヒール・ミヤイの憎まれ口通信

Vol.170

人様より“お鳥様”、日本は豊かな国だって



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子ども時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

Illustration by Kazushige Akita

昨年の話をしよう。

この数年は真冬に朝風呂に入る。外の気温はマイナス25度でも、家の中は22度だ。この表現が南日本文化圏の民には伝わらないことが多い。家の中が22度とは、居間もキッチン、ベッドルーム、押入れ、トイレも洗面所も22度という意味だ。テレビでよく**風呂あがりに寒さで起きる何とかショックで倒れる、と聞く**が、意味が分からない。だったら脱衣所も暖かくしたら良いのに。そう言うとたいてい南の民から変な顔をされる。**そんな寒さに耐える文化が日本を豊かにさせるのか、私は到底理解できない。**

とはいえ、いまは取り壊したが、香川出身の祖父が建てた80坪を超えるレンガ造りの住宅も、暖かいのは居間だけで、日本住宅の基本である空気の循環がとても良かった。ふすまも存在した。いま考えると、南の文化をそのまま北に導入した、本来の北の文化に適応できない住宅だった。

それにしても、外はシバレルなかで40度の風呂に入り、今日はどの入浴剤にしようか悩むひとときは、至極の贅沢なのだろうか。

さて、北海道の道路は広いというが、それは積雪がない場合である。1月、2月の札幌の状況を見ると、3車線が2車線になり、ひどいときは2車線が1車線になることもある。特に今年は札幌市が新しい取り組みをやったそうだ。早い話、除雪、特に排雪の間隔を延ばし、その結果、地域全体に悪影響を与えた。そんななかでオリンピック開催を目指すのだから、ちょっとおかしくね?と、多くの住民は考えるであろう。

ただ自宅の除雪は自分ではやらない。近くのタイヤ屋さんに年間6万円で契約している。ありがたいことに朝7時までに終了し、降雪が10㎝溜まれば何回でもやってくれるので、無線式電動ガレージ前を数回雪かきすれば車の出入りは容易にできる。そのタイヤ屋さんが言うには、不思議なことに豪雪だ！　小雪だ！と降雪量が2倍くらい違っても、除雪の出動はいつも17回か18回だとか。

それでも数年に一度の大雪では、住宅敷地内でトヨタ・カムリの四輪駆動がスタックしてしまうことが数回あった。しかし、同じ条件で金髪・ブルーアイも作ったアメリカ製スバル・アセントの四輪駆動は四輪が各々で考えて駆動するのでスタックすることはない。サンキュー・スバル！

北海道では11月初旬には夏タイヤから冬タイヤに交換する。これが世界の常識だと思っていた。アメリカ

の動画でもアイスバーン（ブラッククアイス）状態で車がスーと滑ってドッカーンとぶつかるシーン、ありますよね？　なぜか、わかりますか？　あれはM＋Sのタイヤだから。M＋Sはマッド&スノーの意味で、冬タイヤではないがある程度の積雪にも対応できるようだ。でも、アイスバーンには対応できない。

以前、アメリカのブリヂストン工場で日本人職員に「どのくらいのドライバーがスタッドレス（冬タイヤ）に変えているんですか?」と聞いてみた。「せいぜい20％くらいでしょう」という返答には驚いた。「なぜそんなに少ないんでしょうか?」と追加で聞いた。「たぶん面倒なのが理由かも」と。本当の答えは分からない。

ちなみにセスナ、パイパー、ビーチなどの小型機や、国際線で使われる747、380のようなコールサインで〝ジャパン・エアー〇〇〇〇ヘビー〟と言われる大型機も、夏タイヤしかない。

日本国内では特にトラック用にオールシーズンタイヤが販売されているが、やはり北海道での使用には勇気が必要だ。最近、乗用車用にやっと、タイヤのサイドウォールにM＋Sが記入された物が販売されている。南日本でも数年に一度は降雪で道路走行に支障がある。それなのに、なぜこのM＋Sを購入しないのだろうか。たぶん冬タイヤを保管できるスペースも限られるし、カリフォルニアでも使われるM＋Sは南日本文化圏でも有効な手段である。

融雪剤散布VS渡り鳥の食害

長沼では3月上旬が積雪のピークになり、多い年で1m、少ない年で30㎝くらいになる。昨年のように少ない年だと、3月25日くらいに整地をして、28日に春小麦を播種できる。春小麦は生育期間を長く取れた分だけ収量が多くなるのは間違いない。品種にもよるが、ほぼ秋まき小麦と同じ収量を目指すことになる。

北海道では融雪を促すために、着色された炭カルや転炉スラグの加工されたミネカルを積雪面に散布する。散布された場所は黒くなるので何もしない場所よりも早く融雪が進む。この融雪作業は春小麦には間違いなく有効な手段になるが、時として思わぬ損害を引き起こす場面に出くわす。

秋小麦の畑にこの融雪剤散布をすると、散布量にもよるがやはり5日程度早く畑にトラクターが入れる。だが、それを狙って白鳥などの渡り鳥が天から舞い降り麦を食い荒らすのだ。

昨年のように3月上旬の積雪量が30㎝くらいであれば、秋小麦に融雪剤は散布しないので、白鳥による被害は長沼の秋小麦畑全体にまんべんなく薄まる。だが、今年のように3月に1mあると、半分くらいの秋小麦生産者は融雪剤散布を行なう。さすがに積雪が30㎝あると白鳥も雪の下の麦を食べないが、融雪が進んだ秋小麦畑を狙って食い荒らされることになる。

私は春小麦を播種する畑には融雪剤散布をしたが、秋に播種した秋小麦の畑は自然融雪を待った。案の定、**融雪が進んだ畑には白鳥が舞い降りパクパクと美味しそうに麦を食べるのだ。**

先ほど秋小麦生産者の半分は融雪剤を散布しないと伝えたが、何割かの生産者は食害を理解して融雪剤散布をしていないのだろう。おととしも雪が少なく融雪剤散布をしなかったが、なぜか、どうしてなのか、**数多あるなか私の秋小麦畑にだけ白鳥が舞い降りた。**周りは「ミヤイさんの麦は出来が良くて美味しいから」なんて変な慰めを言ってくれる。当然多くの所有者の麦畑は2・5haから10haの面積で、半径3㎞以内に点在している。だが、この食害はポイントというより、なぜか白鳥はいつも特定の生産者を狙っているようにも思えるのだ。

その辺を調べる者は……いるんですよね。長沼町役場の2階に国からの出向者が陣取る、野鳥なんとかって部署に美しき地元長沼町の自然を管理していただいている。そこで昨年の降雪が少なく融雪が進み白鳥が舞い降り、食害にあった動画と画像を見せて「この畑に200羽はいますよね、知り合いにハンターがいるのでバンバン撃ち殺してもらいたいので良いですか?」と尋ねた。当然即ノーと返ってくると思われたが、担当者は「産業課の農政係に聞いてみます」と言って未だ返事はない。

国際的な食糧危機が叫ばれる昨今、人様よりも〝お鳥様〟、米を食べろと言っても毎年15万t余るのに4年後に米作れ、か。やってることを国連で発表したら良いんじゃない？　日本は豊かな国だって。